

『ハックルベリー・フィンの冒険』について — コムニタスとしての筏 —

平 倫 子

〈序〉

『ハックルベリー・フィンの冒険』(1885)出版100年を記念して、1984年から1985年にかけて、新しい評伝、論文集、エッセイがcaず多く書かれた。「英語青年」1985年10月号で渡辺利雄は、「新しい衣裳をまとって現われた」それらの研究を紹介し、問題と方向を示している。

山口昌男は、「神話的世界としての『ハックルベリー・フィンの冒険』」という論文で、文化人類学⁽¹⁾の立場からこの小説に光をあて、「記号学を含むさまざまな文学理論の仕事の中で、意外に取りあげられていない」ことを指摘している。

ノーマン・メイラーは、1984年12月9日号のニューヨーク・タイムズ・ブック・レビュー紙に 'Huckleberry Finn, Alive at 100' と題するエッセイを載せている。これについては亀井俊介が、1985年6月号の「中央公論」誌(「百歳の悪童ハックルベリー・フィン」)でとり上げており、またさきの「英語青年」で渡辺もふれており、さらに山口論文でも、亀井の紹介をとうしてとり上げている。

このエッセイは、『ハックルベリー・フィンの冒険』のもつ大衆文学性と、メイラーのジャーナリスト的才覚の相乗効果を新聞読者にうったえようという同紙の意図が強く感じられるが、アメリカ文学史の一つの流れを如実に言いあらわしたものとなっている。

本稿は、これらの刺戟をうけ、また山口論文の問題提起をうけて、民衆文学としての『ハックルベリー・フィンの冒険』をどう読むか、に主眼をおき、作品の中心にある逃走のテーマを考えてみようとするもので

ある。さきに私は、'W. ゴールドィング『蠅の王』にみる異文化としての子ども'(北星論集第26号, 1988)という試論のなかで、島での子ども達の関係は、その前提となっている戦争をしている大人を含んだ普遍的な文化のコンテクストと連鎖しており、子どもの力関係が構造化したとき、子どもの楽園の中で反転が生じる、という文化の構図を示し、反転のエネルギーになる力を異文化としての子どもと捉え、文化の複雑にからみ合った様相を考察した。

そのさい、ひとつの手がかりとした子どもの楽園を、ここでは、ハックと黒人の奴隷ジムのミシシッピ川の筏による移行に置きかえてみる。そして文化人類学者、ヴィクター・W・ターナーが、『儀礼の過程』の中で、民間文芸に登場する象徴的人物の例を列挙し、『ハックルベリー・フィンの冒険』⁽²⁾では、'逃げた黒人奴隷ジム'をあてていることに注目し、彼のコムニタス理論を借りて、ハックとジムの筏の暮らしをコムニタスと考え、作品分析をおこなってゆく。

前半は、ノーマン・メイラーのエッセイの紹介にあて、後半はコムニタスをキーワードにした作品論にあてることにする。

<1>

ノーマン・メイラーのエッセイは、かなり長いものなので、ポイントはそのまま引用しながら、ほかは要約して全体像を示すことにする。

「偉大な小説に加えられたむかしの批評は、惰眠をむさぼっている連中をゆさぶり起こすのにいちばん役に立つ」で始まり、『アンナ・カレーニナ』や『モウビィ・ディック』が出版当初それぞれ酷評されていたことを例にあげ、それに比べれば、『ハックルベリー・フィンの冒険』の受けた罰は軽かった、として次のように言っている。

'The Springfield Republican' 紙は、この小説は「細やかな感情を粗雑な仕方ですいたものにすぎない… 作者クレメンズ氏(マーク・トウェインの本名, 1835-1910)には正しい文章の書き方についてのしっかりした感覚がない」という判決を下したし、マサチューセッツ州コンコード市の公立図書館は「駄作も駄作」と自信をもって言い切っ

た。'The Boston Transcript'紙は、「図書館委員会の委員たちは、この小説が荒削りで品がなく、立派な教養のある人びとよりもスラム街の住人むけである、と断定した」と報じた。

そうは言っても、この小説が全く不愉快なものとして考えられたわけではなく、(中略)「いい物語だ」というのが一致した意見だった。だが、1885年のアメリカ文学の世界に、ひとつの偉大な小説が姿を見せたという意識はまだなく、批評家たちのあいだに、50年後のT. S. エリオットやE. ヘミングウェイによる絶賛を予想できるような雰囲気は殆どなかった。エリオットは、この小説のイギリス版の序文で、「一大傑作… トウエインの才能が遺憾なく発揮されている」と語ることになるし、ヘミングウェイはもっと褒めて、*Green Hills of Africa*⁽³⁾のなかで、エマソン、ホーソン、ソローを軽くあしらい、ヘンリー・ジェイムズとステューヴン・クレインには少し好意を見せてうなずいてから、きっぱり言う——「現代のアメリカ文学はすべて、マーク・トウエインが書いた『ハックルベリー・フィンの冒険』という名の一冊の本から生まれたものである… これはアメリカの最も素晴らしい本なのであって… それ以前にもそれ以後にもこれほど素晴らしいものは一冊もないのだ」と。

ヘミングウェイは、午後のひと時、我慢しきれなくなってひと口味わうすばらし地酒 (vin du pays) を見つけ出す稀有の才能の持主であるが、ひとつだけ他の小説家と共通するいやな面を備え持っている。それはなにひとつためらうことなく断乎として文学作品についての自分の判断を前面に押し出すことである。他の小説家の評価をするさいに彼は、実作者としての経験を作品評価の物指しとして使うのである。「この本によい点数をつけたら、自分の作品を読者が正しく味わうのに役立つか？」と。『ハックルベリー・フィンの冒険』がこの原則にみごとにかなっていることは明白である。

ここでメイラーは、「トウエインはヘミングウェイだけがもっと上手にやれるような書きかたをしているのだろうか」というひとつの疑念をいさぐ。しかしメイラーは、『トム・ソーヤーの冒険』はとても気に入っていたにもかかわらず、11歳か13歳のときに、『ハックルベリー・フ

ィンの冒険』を読んで面白くなくてがっかりした記憶があまりにも強かったのでその後、この作品に関するたくさん話題を知りながらも、もう一度読んでみようという気持ちになれなかった、と述懐し、1984年12月9日号のための、'The New York Times'の原稿を書いている「いま、たとえ自分が『ハックルベリー・フィンの冒険』は並外れた作品だ』と言う一千万人目の読者にすぎなくても、この小説に激しい興奮を感じているし、自分の関心を惹きつけた異常さの秘密もわかった、と言っている。

この本はひどく新しいんだ。私がいま読んでいるのは古典といわれている作品などではなくて、出版社がとどけてくれたばかりの新しい小説のゲラ刷りなのだ。「ご送付申し上げましたのは、とてつもなく優れた小説の活字になった最初のものとお考えいただきとう存じます」と添え書きされて送り届けられた小説なのだ。1950年に逆もどりしてゲラ刷りの *From Here to Eternity*⁽⁴⁾ や *Lie Down in Darkness*⁽⁵⁾ や *Catch-22*⁽⁶⁾ や *The World According to Garp*⁽⁷⁾ を読んでいる感じによく似ている。読みながら絶えずうれしくなったり、びっくりしたり、いらいらしたり、なにおれだって、と思ったり、あら探しをしたり、そして最後には興奮してわくわくしてしまうのだ。

メイラーは、『ハックルベリー・フィンの冒険』を二度目に読んだとこのことをこのように書き、まるで三十歳から三十五歳ぐらいの現代アメリカの作家が、百五十年前のミシシッピ川流域をあつかった歴史小説を書いているみたいだと言っている。そのぐらい作者の物を見る目が現代的なのだ、というわけである。そしてメイラーは、テンポの早い諧謔へと移ってゆく。

それにしても、先輩作家たちの影響が見え見えた。『ハックルベリー・フィンの冒険』の作者は、Sinclair Lewis や John Dos Passos や John Steinbeck といった一流作家から多くを学んでいることは、誰がみてもはっきりしている。Faulkner からは、泥沼のような争いを親子代々にわたってくりひろげる、気ちがいじみた人びとの姿を描く

『ハックルベリー・フィンの冒険』について

ときの調子を借りているし、Vonnegut や Heller の不死身のアイロニーも自分のものにしてしている。Saul Bellow が *Augie March* (『オーギー・マーチの冒険』, 1953) で描いてみせた悪漢冒険小説がとても気に入っていて、その真似をしている素振りをしてみせる。間違いなく言えることは、*Catcher in Rye* (J. D. サリンジャー、『ライ麦畑でつかまえて』, 1951) を暗記しているし、多分 *Deliverance* (James デイッキ、『わが心の川』, 1970) や *Why Are We in Vietnam* (N. メイラー、『なぜぼくらはヴェトナムへ行くのか』, 1967) のあちこちにも手をつけているのがわかる。映画俳優の演技の流儀まで調べつくしたらしく、John Wayne や Victor McLaglen や Burt Reynolds の姿があちこちに見える。きっと小さな町の人生模様を喜劇的に描き出すハリウッドの映画をすごくたくさん知っていて、南北戦争がおこる前の頃のミシシッピ川ぞいの部落の人びとの暮らしを鋭く感じとり、商売っ気たっぷりに滑稽な茶番劇に仕立てあげたにちがいない。(中略)

これぐらい規模の大きい作品で、大きな川を筏で下りながら、アメリカの田舎の姿を活写してやろうと思いついたからには、他人の書いたものからこっそりくすねるのだから大目に見てやっていいのだ。フィクションのためにみせるこの作家の、本能の奥行きの高さには瞠目すべきものがあり、こちらが落着かなくなるほどだ。ハック少年の例で言えば、この新進作家は、ハックを安心して見ていられる普通の少年にはしないように努めたのだ。現代の小説に出てくる人物で、古典のなかの人物像よりもっと生き生き描かれている例は多いが、それにしてもハックルベリー・フィンは、ドン・キホーテやジュリアン・ソレル(スタンダールの『赤と黒』の主人公)よりもずっと生氣躍動していて、思うまま自然に振舞っている。主人公がつぎつぎと冒険を繰り返りひろげながら、やがて紛れもなく高潔な人物に成長してゆく、といったことは、そうざらにあることではない。

こうした才能に惹きつけられて、すっかりそのとりこになってしまえば、作者がふんだんに借り物をしてしても許してしまいたくなるものだ。一度ぐらい大きな勇み足があったって、いまのような無気力な文壇にこんな作家が現われれば、それこそ喝采を叫ぼうと言うものだ。借り

物と言ったって誰かの文体を借りただけの文章ではなくて、実物そっくりなのだ。影響とは心の問題であり、それに対して盗みとは身体ですることなのだ。『ハックルベリー・フィンの冒険』の文章の大部分がヘミングウェイからの剽窃ではない、と言い切れる人があるだろうか？ ヘミングウェイの文章を読んでいるのではないことは、みんな百も承知なのだが。マーク・トウェインは、自分の書いている文章の調子が、ヘミングウェイに似すぎているのを気にして、おこたりにくく‘a-cluttering’とか‘warn’t’とか‘anywheres’とか‘t’other’などと表現を変えてゆくのだが、読者は、変装したってヘミングウェイなんだ、と感じているのだ。

こう言ってマイラーは、『ハックルベリー・フィンの冒険』の第十九章の始めの部分を引用している。

We cut young cottonwoods and willows and hid the raft with them. Then we set out the lines. Next we slid into the river and had a swim, so as to freshen up and cool off; then we set down on the sandy bottom where the water was about knee deep, and watched the daylight come. Not a sound, anywheres—perfectly still—just like the whole world was asleep, only sometimes the bull-frogs a-cluttering, maybe. The first thing to see, looking away over the water, was a kind of dull line—that was the woods on t’other side—you couldn’t make nothing else out; then a pale place in the sky; then more paleness, spreading around; then the river softened up, away off, and warn’t black any more, but gray; you could see little dark spots drifting along, ever so far away—trading scows, and such things; and long black streaks—rafts; sometimes you could hear a sweep screaming; or jumbled up voices, it was so still, and sounds come so far; and by-and-by you could see a streak on the water which you know by the look of the streak that there’s snag there in a swift current which breaks on it and makes that streak look that way; and you see

the mist curl up off of the water, and the east reddens up, and the river, ……

そしてポプラや柳の若木の枝を切って筏をかくした。それから釣り糸を垂れた。その次には、汗を流してさっぱりしようと思って、川へ跳びこんでひと泳ぎした。それから、水の深さがひざくらいの所で、低い砂地に腰をおろして、夜が明けるのを見ていた。どこからも音ひとつ聞こえねえで、静まり返って、まるで世界じゅうが眠ってるみてえだった。聞こえるとすればたまにウングエルがケロケロ鳴くくらいだ。川の向こうを見渡して最初に見えるのは、ぼんやりした線みたいなもので、それは向こう岸の森なんだけれど、そのほかは何も見分けがつかなかった。それから空に薄明るい所ができたと思ううちに、その薄明るい所がどんどん広がっていくと、遠くの川の色も明るくなって、黒というより灰色に近くなってきた。まだずっと遠くだけれど、小さい黒い点みたいな物が流れてるように見えるのは、品物をはこぶ平底船やなんかで、長くて黒い縞になっているのは筏だ。ときどきキーキーいう（8）音や、ガヤガヤいう人の声が聞こえるのは、あたりがあんまり静かだから、物音がすぐそばみたいに聞こえるためだ。やがて川の上にべつべつ（9）の縞が見えてくるが、その縞の模様を見れば、そこに沈み木があって、急流がぶつかって砕けるとそんな縞模様に見えることがわかる。水のおもてにもやがてうずを巻いて、東の空が赤らむと、川もその色に染まって、遠い向こう岸の土手の上に、森のはずれの丸太小屋が見えてくる。

このあとメイラーは、「批評家の礼儀作法というものがあるから」と言って、前半の調子とはおおよそかけ離れた穏当さで、この作品の実際の内容について語りはじめる。「『ハックルベリー・フィンの冒険』は十九世紀の小説であり、第一級の文学作品にふさわしい立派な格式をそなえている」と自分で確認するかのようにつづいたあと、「偉大な小説であるための第一条件は、カリスマ性を持っている人物と同じように、目に見えるほどの霊的雰囲気（10）があらわれているということだ。それほどの光輝につつまれた文学作品には、必ずそのなかに、偉大にして壮厳な象徴

(シンボル)が存在する」として、この場合のそれは川である、と
 言つて、L. トリリング⁽⁹⁾やT. S. エリオット⁽¹⁰⁾の説に寄りそつた論を展開する。

『ハックルベリー・フィンの冒険』には、小説の中を流れている川でいちばん素晴らしい川、わがミシシッピー川があり、筏にのつて川を下つてゆくハック・フィンと逃亡奴隷ジムの旅には、われわれをすっかり川のとりこにしてしまうものがある。この川は作中人物よりも大きな存在であり、ひとつの明確な顯現 (manifest presence) である。つまり、川はこの男とこの少年を支えている造物主 (demiurge) であり、この二人をだましたり、食べ物を与えたり、溺死しそうにさせた、引き離したり、再びもどしたりする神のような存在である。

この川は、フーガ (遁送曲) のように、ハックと逃亡奴隷がつぎつぎと展開してゆく筋書きの物語のど真中を曲りくねつて流れている。逃亡奴隷の名前が Jim でなくて Nigger Jim なのは、この名前が実は奴隷制度そのものを象徴しているということなのだ。逃げて行く白人と逃げて行く黒人のあいだに愛と理解が生まれてくるというのは、この二人の関係が、人間と川の関係に等しいことを示しているが、それは川にも欺瞞と食べ物、別離と回帰があるからなのだ。

そういうわけでこの川は、共感と反感が手を取りあつて語り合う心の奥のいちばん細い神経繊維にまで刺戟を与え、容易には動かされない人間の感情に強い衝撃を与えようとする。

白人と黒人のあいだの憎しみの関係はもうすっかり燃えつきてしまったと言われているが、『ハックルベリー・フィンの冒険』を読んでいると、両者のあいだの愛憎関係がいまだに民族どうしの重大な問題なのだ、ということにまたもや気づかされる。(中略)

この物語の流れに身をまかせて読み進んでいくと、われわれは何でもできるように思えた、あの幸福な時代に戻つてゆく。あの頃の感動の思い出はじつに中味の豊かなものなのだ。希望が腐り、情熱が使い果されてしまったあとに、その感動が不滅の富となつて心のなかに残らないとしたら、偉大なものなんて何もあはしない。もう一度使うことができる富がわれわれにはあるんだ、というのがデモクラシーの与えてくれる希望なのであり、『ハックルベリー・フィンの冒険』が

『ハックルベリー・フィンの冒険』について

いつまでも貴重な財産であり続けるのは、この宝物のおかげでわれわれが自由の身になってデモクラシーとその前提条件について思いをめぐらすことが出来るからなのである。情熱も欲望も夢も気まぐれも理想も貪欲も希望も男女の墮落も、何もかもすべてそれぞれの流儀を謳歌することが許されるなら、この世はいっそう幸せなものになるだろう。人間の、そして人間の振舞いの統計には、悪よりも善のほうがずっと多いのだから。

全身これデモクラティックな人間の権化ともいうべきマーク・トウェインの筆のおもむくところいたるところで、デモクラシーの前提条件に深い理解が示されていて、吟味検討を加え調べあげるのも、またしてもデモクラシーの理念にそそぐわれわれの情熱が水っぽいものになってしまうのだ。

ながくメイラーに依拠しすぎてしまったが、作品刊行五十年後にヘミングウェイが声高に唱えた説のいわば実態調査を、その五十年後にメイラーが行ったと考えるとき、そして、彼が文学プロパーではない視点に立っているという点に注目するとき、このエッセイの再読の意味が見出せるように思う。ハックが100歳で今も元気（‘Huck Finn, Alive at 100’）なのは、とりもなおさず、トウェインの後継者が彼らの作品の中で、それぞれのハック像を時代の試練にかけつけてきていることのあるわれにほかならない。メイラーのエッセイのやや複雑な結末部も、「メイラーは、アメリカの伝統的な理念へのノスタルジーを働かせている」という亀井俊介の見かたも、いろいろな観点からアメリカ文化の不易と流行にまでおよぶ目くばりをわれわれにもとめようとする重い意味あいをふくんだものと言えよう。

<2>

『ハックルベリー・フィンの冒険』は、その内容から大きく二つの部分に分けることが出来る。一つは、前作『トム・ソーヤーの冒険』（1876）と同質と考えられる部分で、具体的には、第一章から第十一章までと、第三十二章から終章までを含む。もう一つは、前作とある意味で異質と

考えられる残りの部分で、第十二章から第三十一章までである。この区分は、前作の主人公トムの枠組みのある、なしによるものではあるが、作品の成立事情も考え合わせるとき、先の第十二章から第三十一章までの部分は、第十六章をさかいにさらに二つに分けて見るほうがよいように思う。なぜなら、マーク・トウェインは、1876年『トム・ソーヤの冒険』が出版されるとすぐに、『ハックルベリー・フィンの冒険』の原稿を書きはじめ、第十六章の途中まで書いて、中断していたいきさつがあるからである。

この中断に関してはいろいろな理由が考えられているが、ここでは中断箇所と、中断の時点で『ハックルベリー・フィンの冒険』のための原稿として書いていたある部分のことについてだけふれておくことにする。

Norton 版の『ハックルベリー・フィンの冒険』の第十六章の注 (P. 73) によれば、トウェインのオリジナル原稿では、第十六章の第二パラグラフのあとに、大筏で仕事をする男たちの暮らしを描いた長い一節 (通称 ‘筏の男たちのパッセージ’) がつづくことになっていたが、1883年に『ミシシッピー河上の生活』を出版したとき、その中に組み込んだので出版社の指示によって『ハックルベリー・フィンの冒険』では削除した、ということである。そんなわけで、初版以来ずっと ‘筏の男たちのパッセージ’ ぬきの本をわれわれ読者は見てきているが、上記の注によれば最近では ‘筏の男たちのパッセージ’ はもとに戻すべきだとの議論もたかまりつつある、ということで、巻末に補追としてその一節を加えている (P. 233)。

次に、その『ミシシッピー河上の生活』の第三章「過去のフレスコ画から」の ‘筏の男たちのパッセージ’ とはどのようなものか見てみよう。それはミシシッピー川の歴史、初期の通商、石炭船と材木筏などについて語られ、少年の日の思い出にもふれたあと、次の部分につづく。

From *Life on the Mississippi*
〔The Raftsmen's Passage〕

By way of illustrating keelboat talk and manners, and that now departed and hardly remembered raft life, I will throw in, in this place, a chapter from a book which I have been working at,

by fits and starts, during the past five or six years, and may possibly finish in the course of five or six more. The book is a story which details some passages in the life of an ignorant village boy, Huck Finn, son of the town drunkard of my time out West, there. He has run away from his persecuting father, and from a persecuting good widow who wishes to make a nice, truth-telling, respectable boy of him; and with him a slave of the widow's has also escaped. They have found a fragment of a lumber-raft (it is high water and dead summer-time), and are floating down the river by night, and hiding in the willows by day—bound for Cairo, whence the negro will seek freedom in the heart of the free states. But, in a fog, they pass Cairo without knowing it. By and by they begin to suspect the truth, and Huck Finn is persuaded to end the dismal suspense by swimming down to a huge raft which they have seen in the distance ahead of them, creeping aboard under cover of the darkness, and gathering the needed information by eavesdropping:

But you know a young person can't wait very well when he is impatient to find a thing out. We talked it over, and by and by Jim said it was such a black night, now, that it wouldn't be no risk to swim down to the big raft and crawl aboard and listen—they would talk about Cairo, because they would be calculating to go ashore there for a spree, maybe; or anyway they would send boats ashore to buy whisky or fresh meat or something. Jim had a wonderful level head, for a nigger: he could most always start a good plan when you wanted one.

I stood up and shook my rags off and jumped into the river, and struck out for the raft's light. By and by, when I got down nearly to her, I eased up and went slow and cautious. But everything was all right—nobody at the sweeps. So I swum down along the raft till I was most abreast the camp-fire in the

middle, then I crawled aboard and inched along and got in among some bundles of shingles on the weather side of the fire. There was thirteen men there — they was the watch on deck of course. And a mighty rough-looking lot, too. They had a jug, and tin cups, and they kept the jug moving. One man was singing — roaring, you may say; and it wasn't a nice song — for a parlor, anyway. He roared through his nose, and strung out the last word of every line very long. When he was done they all fetched a kind of Injun war-whoop, and then another was sung.

龍骨船でする話とか、行儀とかの一斑として、また今は過ぎ去つて、殆ど忘れられてゐる筏生活の説明に、私は、この五、六年間やみやみ書いて来たが、もう五、六年もすれば書き上げると思ふ或る本からの一章をここに挿入しよう。この本は無智な村童でハック・フィンといつて私の西部にゐる時代の町の酔ひどれの息子であるが、その子供の生活を少し精しく語つたものである。子供は彼を虐待する父の許からも、立派な、嘘をつかない良い子にしようと思つて付け廻つてゐる人のよい寡婦の許からも、逃げ出した。その寡婦の家の奴隷も亦一緒に逃げたのである。彼等は材木筏の切れ端を見つけ出して（時は眞夏の増水期であつた）晝間は柳の木の間にかくれ、夜は河を下つて行つた — ケイロに向けて。そこから黒人奴隷は自由の州の懐にとびこんで自由を求めるつもりであつた。が、霧のためにケイロを知らないで通り過ぎてしまつた。しばらくして、さうぢやないかと気がつき始めると、ハック・フィンはこの悲観すべき疑ひを正すために、ずっと行手に見えた大きな筏に泳ぎつき、夜の闇に乗じて筏にもぐりこんで、他人の話のを偷み聞いて必要な知らせを集めてくれと頼まれてしまつた。

若い連中つてもものは何か知りたいとやきもきしてゐる時は待つてゐられないものだ。僕達は相談してゐるが、やがてジムは今は闇夜だから、大筏に泳ぎ着いて筏上に忍びこんで、他人の話のを聞く — ケイロの話が出るだらう、といふのは、大方そこで一と飲みしに上陸しようと思つてゐるだらうから、それとも岸へボートを着けて、ウイスキーか、生肉か、何か買ふつもりだらうから — 位は難しくはなからうと

言ひ出した。ジムは黒人にしては仲々よい分別をもつてゐる。いつも知慧のいる時は名案を出してくれる。

僕は起ち上つてぼろ着をかなぐり捨てると、河へとびこみ筏の燈を目當に泳ぎ出した。間もなく筏に近づくと速度を落してゆるゆる用心深くなつたが、萬事好都合——誰も大懼のところにはゐなかつた。そこで筏にそつて、真中の篝火と並ぶ位のところまで泳ぎ下ると、筏上にのぼりこんで火の風上に積んである板の積荷の中にかくれた。そこに十三人ゐて——勿論、甲板を見張つてゐた。それが、みんな恐ろしい顔付をした連中で、酒瓶と錫のコップとをもつて、酒瓶を一座に廻してゐた。一人は歌つてゐるし、——いや、がなつてゐるし、歌の文句はひどい——ともかく、客間には向かない——句だつた。鼻歌でどの行の終ひの文句も長く引つばる奴だ。それが濟むと、インディアンのとよ關の聲のやうなものを皆んなしてやらかしてから、他の歌を唱つた。⁽¹²⁾

そのあと「僕」は身をかくして、荒くれ男たちの大さわぎの一部始終を見ている。と、暗やみで誰かにさわられ、「牛ほどの蛇」と間違えられて見つかつてしまい危い目にあいそうになるが、泣いて偽りの窮状を訴えるなじみの手をつかつて筏がしらに許してもらい、筏に泳ぎもどつて再びジムに合い、情報は何も得られなかつたが、家（筏）にかえられてうれしい、というところで終っている。

この「筏の男たちのパッセージ」のあと現在の第十六章のはほ終り近く、正確には汽船がハックとジムの筏にぶち当たってきたところまでを一気に書いて（ノートン版の注によれば、第一章から第十六章のここまでで原稿で四百枚を約一ヶ月で書き上げたということである）、トウエインは1876年夏、『ハックルベリー・フィンの冒険』の執筆を中断している。

この小説の中で、第十六章とはそういう部分なのである。それらのことを考えあわせると、この小説は次のように四つに分けて考えるのがよいのではないかと思う。

- (1) 第一章から第十一章まで
- (2) 第十二章から第十六章まで

- (3) 第十七章から第三十一章まで
- (4) 第三十二章から終章まで

以下、四つをそれぞれの区分ごとに、ハックの逃走の起点(どこから)と到達点(どこへ)に特に注目しながらあとづけ、その周辺にふれながら小説全体を見てゆくことにする。

(1) ハック、偽装死により生れかわる

ダグラス未亡人がハックを養子にして教育しようとしたが、あまり厳しくまじめにやるので我慢が出来なくなるとび出し、砂糖だるの古巣へもどる。トム・ソーヤーに見つかり、ダグラス未亡人のところへ帰るなら、トムの盗賊団の一味に入れてやると言われ、仕方なく逆もどりする。この時、ダグラス未亡人が旧約聖書の「出エジプト記」のモーゼの話をはックにしているのは、物語の主題にとって重要である。ダグラス未亡人の姉で同じ家に住んでいるミス・ワトソンが彼に地獄(the bad place)の話をしてきかせたとき、ハックは「そこへいきたい」と言っ
て、彼女をひどく怒らせるが、「おらはわる気で言ったわけじゃねえ。ただどこかよそへいきたかっただけだ。あきたから場所を変えたかっただけで、どこだってよかった」(All I wanted was to go somewhere; all I wanted was a change, I warn't particular.)と言っているが、このことは1853年故郷ハンニバルをあとにして以来、アメリカ各地を回っていたトウエインが、1867年母親に宛てて「私が知りかつ感ずるすべては、ただもう無性に動きたくて、動きたくて、動きたくてたまらない、ということなのです⁽¹³⁾」と書き送った手紙を思い出させる。恐らくはじめてのヨーロッパ旅行をした時の旅先からのものと思われるが、のちに妻となる女性と出会う直前の、三十二歳のトウエインの心情の吐露であったのだろう。

父親はヴァージニア州出身、母親はケンタッキー生れというトウエインの血は、新しい政治、宗教を求めてイギリスからやってきてニュー・イングランドに定着したピューリタンの伝統とは別の、El Dorado(黄金の国)を求めてヴァージニア州に入った移民の伝統を受けついでいることは明らかである。彼らが理想の国を求めて西へ西へと進んでゆくエ

ネルギーは、辺境開拓精神としてよく知られているものである。

W. ホイットマン (1819-92) は、詩集 *Leaves of Grass* (1855-92) におさめられた 'Pioneers! O Pionessrs!' (「開拓者よ、おお開拓者よ」) という詩の中でその精神を、次のように表わしている。(全二十六連の詩であるが、三、五、二十三、二十四、二十五連のみを引用する。)

O you youths, Western youths,
So impatient, full of action, full of manly pride and friendship,
Plain I see you Western yourths, see you tramping with the
foremost,
Pioneers! O pioneers!

All the past we leave behind,
We debouch upon a newer mightier world, varied world,
Fresh and strong the world we seize, world of labor and the
march,
Pioneers! O pioneers!

Not for delectations sweet,
Not the cushion and the slipper, not the peaceful and the
studious,
Not the riches safe and palling, not for us the tame enjoyment,
Pioneers! O pioneers!

Do the feasters gluttonous feast?
Do the corpulent sleepers sleep? have they lock'd and bolted
doors?
Still be ours the diet hard, and the blanket on the ground,
Pioneers! O pioneers!

Has the night descended?
Was the road of late so toilsome? did we stop discouraged nod-

ding on our way?

Yet a passing hour I yield you in your tracks to pause oblivious,
Pioneers! O pioneers!⁽¹⁴⁾

おお君ら若者たちよ、西部の若者たちよ、
熱い思いにたぎり、奔放に行動し、男らしい誇りと友情に溢れる、
君ら西部の若者たちが、君らが先頭にたって進みゆくさまが、わたし
にははっきり見える、
開拓者よ、おお開拓者よ。

過去はすべて背後にのこし、
もっと新しく大きな世界、多様な世界に進み出ていく、
わが手につかむその世界、労働と前進の世界には新鮮な力みなぎる、
開拓者よ、おお開拓者よ。

甘い悦楽を求めはせず、
クッションやスリッパもいらず、平和にすがるやつら、勉学に溺れる
やつらにも用はない、
安全で飽き飽きさせる富などに、気のぬけた享楽などにも用はない、
開拓者よ、おお開拓者よ。

食いしんぼうの食道楽が美食にふけているというのか、
でっぷり肥ったやつらが惰眠をむさぼり、すでにドアを締めてかんぬ
きもおろしたのか、
いいではないか、我らの食事は粗末なもので、毛布も地面に敷けばい
い、
開拓者よ、おお開拓者よ。

夜のとばりはおりたのか、
このあたり、道はそれほど難儀だったか、歩きながらうとうとして元
気が失せて立ちどまったか、
それでもわたしは道すがら足をとどめてぼんやりするほんの短いひと

ときだけを君らに許してやるだけだ、
開拓者よ、おお開拓者よ。⁽¹¹⁾

ホイットマン自身も幼くして植字工になり、のちに新聞記者を経て、放浪の詩人となってアメリカの詩壇に、自由詩のスタイルや南部なまりを駆使した詩などを書いて新風を拓いた。転換期のアメリカを生きた同時代人としてのホイットマンとトウェインの接点は、どのようにとらえられているのだろうか。

ハックは、ミス・ワトソンから祈ることを教えられるが、いくら祈っても願いごとがかなわない。そのわけをたずねられたダグラス未亡人は彼に、お祈りをしてもらえるものは‘霊的贈り物 (spiritual gifts)’で、他人を助けて、他人のためにできるだけのことをして、いつも他人のことを心配して、ぜったい自分のことは考えちゃいけない、とおしえる。これを聞いてハックは、森の奥まで行って長いあいだそのことを考える。このときハックは、ダグラス未亡人とミス・ワトソンにそれぞれ別の神さまがいるらしい、と思うが、あんまり得にもならなそうなので忘れることにきめる。(しかし第三十一章の決定的瞬間に、このことをハックが忘れていないことを読者は知ることになる。)

家にも、学校にも、しぶしぶなじみかけていたある日、ハックは新しくつもった雪の上に、左かかるとに悪魔よけの十字形のついた足あとを見つける。しばらく姿を見せなかった父親 (Pap) がハックとハックの持っている大金とをとり戻しに森にもどってきていたのである。ダグラス未亡人は法律に訴えて養育権を主張しようとしたが、Pap についての事情を知らない新米判事が、子供と父親を離別させることは出来ない、と主張して裁判に持ちこまれる。そこで Pap はハックをつれて川をさかのぼり、イリノイ州の側の森の中の古い丸太小屋にゆき、二人はそこで暮す。ハックは日ましにはげしくなる Pap の暴力に耐えられなくなるが、嚴重に見張られているため、逃げられない。三日間もとじこめられたままになるなどして、とてもさびしく、こわくなり、小屋から逃げ出す工夫を「よくよく」考えたすえ、自分が殺されように見せかける念の入った工作をして逃亡をくわだてる。このときハックは、「トム・ソー

ヤーならこういうことが好きで、人をアッと言わすような手を考えるだろう」とつぶやく。夜を待って、増水期で流れてきたカヌーでジャクソン島にむかい、そこに到着く。

ハックはPapからののがれ、ジャクソン島で気ままなひとり暮らしをはじめ。そのうちさびしくなり、島の探検に出かける。ヘビを追いかけでどんどん進んでいくうちに、いきなりまだ煙を出しているたき火にぶつかる。あわててひきかえすが、不安がつって夜も眠れない。そのうちにハックは、誰が島にいるのか絶対見つけてやろう、と追われるものの立場から追うものの立場へ気持の転換をはかって気がらくになり、ミス・ワトソンのもとで働いていた黒人奴隷ジムがたき火のそばで眠っているのを見つける。ジムは、告げ口は絶対しないと約束するハックに、ミス・ワトソンが自分を売るつもりらしいのを知って逃げてきたことを告げる。そして二人の島ぐらしがはじまる。島ではジムのリードで、彼の知恵を駆使した生活がはじまる。あるとき、洪水で流れてきた家の中で、役に立ちそうな品物を物色するが、そこに撃たれて死んだ男がいたが、ジムはその男のことについて多くをハックに語らない。ここでハックの前でPapとジムが入れかわることになるが、このことはハックには物語の最後まで伏せられたままである。

川の水がもと通りにおさまったとき、ハックは退屈になって、さきに流れてきた家にあった女の子の古着を着て町の様子をさぐりにゆく。カヌーで町はずれにたどり着き、明りのついている小屋をたずねる。四十歳ぐらいの町にやってきたばかりの女性、ジューディス・ロフトスは、ハックの誘導尋問に町の噂を話してきかせ、ジムには逃亡の罪に加え、ハック殺しの疑いもかけられ三百ドルの賞金がかかっていること、Papもハック殺しの疑いで、二百ドルの賞金がかかっていること、そしてジューディスの夫はその晩たき火の煙をたよりにジャクソン島に逃亡奴隷をさがしにゆく計画をたてていることを話してきかせる。そして彼女は女の目ざとさで、ハックの女装を見ぬき、うそを見ぬき鋭い指摘をたっぷりする。ハックは飛んで帰って追っ手のかかっているジムをつれ、見せかけのたき火を残し、ジャクソン島をあとにする。

ダグラス未亡人の養子になること、学校や日曜学校の生徒になること、そしてトム・ソーヤー盗賊団の一員になることでさえもが、ハックの側

から見れば、社会の慣習的な生きかたと映り、窮屈で気のすすまないものであった。がしかし、それらすべてをたち切って、Papから逃れるための見せかけの死を仕組んだことで、ハックはPapとの絆も断ち切った。そして彼は生れかわったと考えることが出来る。

ジムに出会い、約束を聞き入れて責任をひき受けたあとのハックの変装や彼の言ううそはすべて、ジムと自分の究極の目的である生きて自由になるための方便となる。女装という仕掛けは、一見トム・ソーヤー的ロマンチズムをただよわせているように見えるが、本質的にそれとは異なり、いったん絆を切ると、外観や名前は何でもよくなって、ジュディスからセアラ・ウィリアムズ・ジョージ・アレキサンダー・ピーターズと彼が出まかせに言った名前を全部つなげて呼ばれることになり（第十一章）、ジョージ・ジャクソン（第十七章）になり、ついにはトム・ソーヤー（第三十一章）にさえなってしまう。言いかえれば社会的には匿名状態になったのである。

（2）ハックとジムの筏での暮らし その一

筏での暮らし、すなわち水上での生活は、陸上の生活の規範をはぎ落とすことから始まる。トウェインは、少年時代の思い出と、水先案内人としての彼の経験を『ミシシッピー河上の生活』（1883）という作品にまとめたが、その第四章の冒頭で、「私の少年時代には、ミシシッピー河西岸に位する私の村（ハンニバル）で、遊び仲間の変らざる野心といったら、一つしかなかった。即ち、川蒸気の乗組員になることであった。それは王侯のような給料がもらえるすばらしい職業だった。」と記している。見習いの経験について書かれた第六章には、親方ボックスビイの「お前、小さな覚え帳をこしらへな。そして俺が何か言ったら直ぐさま控えておきな。水先案内人になるにはたった一つしか途がねえ。それは河筋を全部暗記するんだ。いろはと同じ位に。」という言葉がある。第九章では見習期間中の困惑が描かれているが、一つ一つ経験を重ねるうちに、「水面は、すばらしい本になった。… 後から後からその心を語ってくれ、一番大切に秘めた神秘をも語ってくれる本となった。… 毎日新しい話を聞かせてくれるのだから、延々千二百哩の間、興味のない頁は一頁もなかったし、読んで損のいく頁もなかったし… 飛ばしてもいいと

いう頁もなかった。」(『ミシシッピー河上生活』PP.95-96)

けれども、いろはと同じ位に川を熟知し、すばらしい知識を得ると、それと同時に失うものも多かったと言って、船の客が示すごく普通の感じかた、例えば船から見る遠景、あるいは日没の景色などに対する感動を失ってしまった、と水上の安全を思う気持が陸上のロマンチックな美しさを求める気持とあい入れないものになってしまったことを憂えている。これらのことは、ハックとジムの筏での生活の場面にもあてはまる。すなわち筏の上の暮しては、陸上の生活で意味のあったものが意味を失い、そこではかくれて見えなかったものが姿をあらわし意味をもつことになるのである。

さきにふれたターナーの理論を手がかりにして、筏の生活を考えてみることにする。ターナーは、神話や民間文芸に出てくる‘聖なる乞食’‘三男坊たち’‘小さな仕立屋’‘愚か者’などの象徴的な人物が、普遍的人間性という価値を代表し重要な役割を演じるとして、チェホフの『ロスチャイルドのヴァイオリン』のユダヤ人のヴァイオリン弾きのロスチャイルド、マーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』の逃げた黒人奴隷ジム、ドストエフスキーの『罪と罰』でラスコルニコフを救うソーニャなどの例をあげている。かれらは構造的には劣位のもの、ないし境界^{リイタム}的存在ではあるが、ベルグソンが“開かれた道德”と呼んだものを表象するものであり、コムニタスと関係する、と言って次のようにつづける。

儀礼の境界の段階にある修練者、征服された土着の人々、弱小民族、宮廷の道化師、聖なる乞食^{ゴジフ}僧、よきサマリア人、千年王国論運動^{ミルレニウム}、法の放浪者たち、父系社会における傍系の母系、母系社会における傍系の父系、修道院の戒律といった一見複雑多岐な諸現象の特質を説明しようとするひとつの仮設について、注意深く再検討するときがきたようである。これらはたしかに社会現象のてたらめに組み合わされた一群ではある！しかし、それらはすべて以下のような共通の特徴をもっている。すなわち、それらは、(1)社会構造の裂け目にある、(2)その周辺にある、あるいは、(3)その底辺⁽¹⁶⁾を占める、人間であり原理である。

境界にある人間（敷居の上の人たち⁽¹⁷⁾）の属性は、例外なくあいまいである。このあり方やこの人たちは、平常ならば状態や地位を文化的空間に設定する分野のネットワークから脱け出したり、あるいは、それからはみ出したりしているからだ。境界にある人たちはこちらにもいないし、そちらにもいない。かれらは法や伝統や慣習や儀礼によって指定され配列された地位のあいだのどっちつかずのところにいる（『儀礼の過程』 p.126）と説明し、この境界的な時期にみられる構造化されていない社会の様式としての共同体を、コムニタス（ラテン語の *communitas*）と名づけた。彼はコムニタスの特性を項目別にあげ、それと対比する社会的プログラムを身分体系と呼び、両者の属性のちがいを次のように表わした。

LIMINALITY	STATUS SYSTEM
Transition	state
Totality	partiality
Homogeneity	heterogeneity
Communitas	structure
Equality	inequality
Anonymity	systems of nomenclature
Absence of property	property
Absence of status	status
Nakedness or uniform clothing	distinctions of clothing
Sexual continence	sexuality
Minimization of sex distinctions	maximization of sex distinctions
Absence of rank	distinctions of rank
Humility	just pride of position
Disregard for personal appearance	care for personal appearance
No distinctions of wealth	distinctions of wealth
Unselfishness	selfishness
Total obedience	obedience only to superior rank
Sacredness	secularity
Sacred instruction	technical knowledge
Silence	speech

Suspension of kinship rights and obligations	kinship rights and obligations
Continuous reference to mystical powers	intermittent reference to mystical powers
Foolishness	sagacity
Simplicity	complexity
Acceptance of pain and suffering	avoidance of pain and suffering
Heteronomy	degrees of autonomy ⁽¹⁸⁾

リミナリティ	身分体系
移行	状態
全体	部分
同質	異質
コムタニス	構造
平等	不平等
匿名	命名の体系
財産の欠如	財産
身分の欠如	身分
裸ないし制服	服装による識別
性欲の節制	性欲
性別の極小化	性別の極大化
序列の欠如	序列の識別
謙虚	地位に対するプライド
個人の外観の無視	個人の外観に対する配慮
富の無差別	富の差別
非自己本位	自己本位
全面的服従	上位の序列にのみ服従
聖なる性質	俗なる性質
聖なる教訓	技術的知識
沈黙	ことば
親族関係の権利と義務の停止	親族関係の権利・義務
神秘的な力に対する絶えざる祈願	神秘的な力に対する間欠的な問いかけ
愚かさ	聰明

単純
苦悩の受容
他律性

複雑
苦悩の回避
自律性の諸段階⁽¹⁹⁾

既知の領域から未知なる辺境にむかって水上を移行するハックとジムの筏の生活は、上の表のリミナリティの項目にすべてあてはまると考えてよいのではないだろうか。そうだとすれば、この小説に登場するミンシッピー川流域で生活する他の人たちはすべて、身分体系の項目に吸収される。こう見ることで、ハックとジムの逃走のテーマが非常に明確になってくる。

彼らは、間もなく大嵐にぶつかる。その後、難破した汽船ウォルター・スコット号を見にゆき、三人組の盗賊に出くわす。三人は仲間割れをして二人が一人を痛い目にあわせよう（一人を沈みつつある船に置き去りにしよう）と企んでいるのを聞きつけ、ハックは彼らのボートをうばって三人ともを痛い目にあわせよう、と考え実行するが、三人のことが心配になる。「たとえ人殺しのやつらでも、あんなはめに陥ったら、どんなに恐ろしいだろうと思いはじめた。おらはそういう自分だって、いつ人殺しになるか分かったもんじゃねえ、そうなったらどんな気持だろうって考えた。」(岩波(註) p.137) (I begin to think how dreadful it was, even for murderers, to be in such a fix. I says to myself, there ain't no telling but I might come to be a murderer myself, yet, and then how would I like it? [Norton 版, p.61]) そう考えてハックは、難破船の中に 'Pap と Mam と Sis と Miss Hooker' がいて困っているので助けてほしい、と通りかかったスチーム・フェリーの船員に泣きついて救いを依頼し、気持がらくになる。

目ざしていたケーロ（ミンシッピー川とオハイオ川の合流地点、そこから汽船でオハイオ川を上って自由州に入る計画だった）にあと数日というところまでこぎつけたとき、濃霧に見舞われカヌーに乗ったハックと、筏に乗ったジムとが別れわかれになる。闇と霧との陰気さ、さびしさと、ジムをさがすことでハックはへとへとに疲れてうたたねをしてしまう。目をさますと霧は晴れ星がまたたいている。やがてジムの筏が見えるがジムも苦闘のあとをしのばせて眠っていた。目をさまし、ハック

がそばにいたので驚いているジムを、ハックは「これはどういう意味だ？ 酒を飲んでたのか夢を見ていたのか」とからかう。それからやっとのことで話の筋道をたどったジムは、ハックの顔をじっと見つめて次のように言う。

“What do dey stan’ for? I’s gwyne to tell you. When I got all wore out wid work, en wid de callin’ for you, en went to sleep, my heart wuz mos’ broke bekase you wuz los’, en I didn’ k’yer no mo’ what become er me en de raf’. En when I wake up en fine you back agin’, all safe en soun’, de tears come en I could a got down on my knees en kiss’ yo’ foot I’s so thankful. En all you wuz thinkin’ ‘bout wuz how you could make a fool uv ole Jim wid a lie. Dat truck dah is *trash*; en trash is what people is dat puts dirt on de head er dey fren’s en makes’ em ashamed.”

Then he got up slow, and walked to the wigwam, and went in there, without saying anything but that. But that was enough. It made me feel so mean I could almost kissed *his* foot to get him to take it back.

It was fifteen minutes before I could work myself up to go and humble myself to a nigger — but I done it, and I warn’t ever sorry for it afterwards, neither. I didn’t do him no more mean tricks, and I wouldn’t done that one if I’d a knowed it would make him feel that way. (Norton 版 p.72)

「どういう意味だって？ 話してやるから聞きなせえ。あっしは、くたくたになるまで働いたり、おめえさんの名前を呼んだりしてから眠ったけど、おめえさんがいなくなったんで胸がつぶれそうになって自分や筏なんかどうなったってかまわねえと思っただ。それから目をさましたら、おめえさんが無事に元気でまた戻ってきたんで、うれしさのあまり涙が出て、ひざまずいておめえさんの足にキスしてえくれえだった。それなのに、おめえさんときたら、どうやってジムの野

郎をだましてからかってやろうかって、そればかり考えていただな。そこに散らばってるのはごみくずだ。だけど、友だちの頭にごみをぶちまけて恥をかかせるような人間も、やっぱしくずだべ」

そう言うジムはゆっくり立ち上がって、小屋まで歩いて行って中にはいった。それっきり何もいわなかったけど、それで充分だった。おらはとても恥ずかしくって、取り返しがつくもんなら、ジムの足にキスしてもいいと思いたくえだ。

おらがやっと腰を上げて、わざわざ黒んぼのジムのところまで行ってあやまったのは、それから十五分も後のことだが——思いきってそうしたことを、おらはあとでちっとも後悔していねえ。それ以後おらは、ジムをベテンにかけるようなまねは一つもしなかった。あの時だって、ジムにあんな思いをさせると知ったら、やりやしなかっただろうに。(岩波(上) p.162)

ダニエル・ホフマンは『アメリカ文学の形式とロマンス』の中で、ジムに対する各人物の関係が、その人物の本性を解き明かす鍵である、と断言し、「ジムはこの作品の道徳的試金石とも言うべき人物である」と言っている。⁽²⁰⁾

しかし、もうすぐ自由になれると思いはしゃぐ気持をかくさないジムを見て、ハックはジレンマにおちいる。今までは自分のしていることがどんなことか分かっていなかったが、今わかってくると、「胸の中でしこりになって、じりじりとおらを苦しみはじめた」(岩波上. p.164) (it staid with me, and scorched me more and more. Norton 版, p.73)

自由の身になったら貯金をし、たまったら女房をワトソンさんのそばの農場の人から買いもどし、夫婦で働いて二人の子供を買い取る。もし子供たちの主人が売らないと言ったら奴隷反対派の人に頼んで盗んできてもらう、などと声をあげて主張するジムを見て、ジムの値うちが下がったような気がして、ハックはがっかりする。そして「最初の明かりが見えたら、岸までこいでいって、話すから」(I'll paddle ashore at the first light, and tell.) (傍点筆者) と言って、そのとたんほっとし、胸のしこりが消えるのを感じる。傍点の部分は、話し手と聞き手の間に意味のとりちがえのある部分である。つまりハックはジムのことを密告する

つもりで言ったのに対し、ジムはケーロの位置を人にたずねるという意味にとったのである。ジムはハックをとうぜん奴隷反対派 (A'blitionist とジムは言っている) と信じ込んでいる。ハックの気持はまだ迷っていたが、ジムにその言葉を先制されることでいら立って、話す(密告する) 気になったのである。

こうしてハックは、ジムに見送られてぐらぐらした気持ちのままカヌーで岸にむかう。途中で逃げた黒人を追跡している二人に出合うが、弱気になって密告できず、ぐずぐずして結果的にジムをかばう。しかしそのことで後にもどってから自責の念にかられる。ここでぐらぐらしたハックの気持は、そのまま作者トウェインの気持の投影と見ることができる。ここではトウェインも、この問題の答を保留しているのである。ともかくハックは元気がない。

They went off, and I got aboard the raft, feeling bad and low, because I knowed very well I had done wrong, and I see it warn't no use for me to try to learn to do right; a body that don't get *started* right when he's little, ain't got no show — when the pinch comes there ain't nothing to back him up and keep him to his work, and so he gets beat. Then I thought a minute, and says to myself, hold on, — s'pose you'd a done right and give Jim up; would you felt better than what you do now? No, says I I'd feel bad — I'd feel just the same way I do now. Well, then, says I, what's the use you learning to do right, when it's troublesome to do right and ain't no trouble to do wrong, and the wages is just the same? I was stuck. I couldn't answer that. So I reckoned I wouldn't bother no more about it, but after this always do whichever come handiest at the time. (Norton 版 p. 76)

だって、自分でもまちがったことをしたのがよく分かっていたし、正しいことをしようとしてもおらにはできねえと思ったからだ。小さいころのやり始めが正しくなかった者は、もう見込みがねえんだ — いざという時に支えになって、最後までやりとげさせてくれる後ろ立

『ハックルベリー・フィンの冒険』について

てがねえから、負けちまうんだ。それからおらは、ちょっと考えて、待てよ、とひとりごとを言った — かりに、正しいことをして、ジムを引き渡したとしたら、今よりい気分になっていただろうか？ そうはならねえ。いやな気分だろう — 今と全然同じ気分だろうよ。それじゃ、せっかく正しいことをやろうとしたってなんの役に立つ？ 正しいことをするほうが骨が折れて、まちがったことをするほうが骨が折れねえで、しかも報いは同じならば？ おらは、ぐっとつまって、それに答えられなかった。そこでおらは、そんなことでくよくよするのはもうやめにして、これから先はいつでもその時にいちばんやりやすいことをやろうと思った。 (岩波文庫(上) pp.171-2)

結局、霧の晩にケーロを通り過ぎていたことがわかり、そのうえ、川をさかのぼることの出来るカヌーがなくなってしまうのに気づき、落胆していた二人の筏に、汽船がぶちあたって二人はふたたび離ればなれになる。先にも述べたが、トウェインは1876年、ここで『ハックルベリー・フィンの冒険』の原稿を中断している。

(3) 筏での暮し その二

中断のあとトウェインは、1879年に第二十一章の一部までを書いた。1882年一月には *The Prince and the Pauper* を出版し、同年四月ミシシッピー川をニュー・オーリンズまで下り、昔をしのぶ旅をしている。その旅に刺戟をうけ、1883年五月には *Life on the Mississippi* を出版した。その後1884年十二月に、まずイギリスで *Huckleberry Finn* が出版され、翌年二月にアメリカで出版された。

この間の事情を、さきの1984年12月9日号 *New York Times Book Review* 紙は次のように報じている。

この小説の原稿は1884年の秋にニューヨークの出版社に渡され、その年のクリスマスの売出しに間に合う見込みだった。ところが『ハックルベリー・フィンの冒険』の出版のためにマーク・トウェインが設立した出版社の社長になったトウェインの義理の甥、チャールズ・L・ウェブスターが、さし絵の図版の印刷の過程で、アンクル・サイ

ラスを描いたさし絵の一枚が公序良俗に反すると言われそうなことに気づき、これを削除し、新しいものとさし替えることにきめた。費用がかさみすぎるとしぶる担当者にウェブスターは、このまま出版、発売されてしまったら、支払うべき費用は25万ドルを下らないだろう、そのうえクレメンス氏は上品でまじめな人だという世間の信用ががた落ちになるだろうと主張し、この小説は1885年二月十八日までアメリカでは日の目を見なかったのである。

Peter Coveney はペンギン版の『ハックルベリー・フィンの冒険』につけた序文(1966)で、トウェインの執筆中断に着目している。トウェインはこの小説を書き出した当初は、奴隷制度や解放の問題にかかわる意志も必要もないと思い、そのような問題は歴史家にゆだねればよいと考えていた。しかしミシシッピー川の少年というシンボルを自分のものにしていたので、ケーロを過ぎてもおおハックとジムを南下させ、王様と公爵がいかだを攻略しかけた時も、南下しているのだからジムが逃亡奴隷であるはずがない、とハックに言わせてプロットを正当化している、とカヴニーは見ている。これは、さきにメイラーが、川の流れて二人の逃走をフーガにたとえていたことを思い出させる。メイラーがジムの時代の象徴と言っているのも、人種問題などにみられる、古くて新しい問題を川の別離と回帰に結びつけてあらためて認識しなおしていると考えられる。

ところでカヴニーは、トウェインが小説を再開したあと、想像力と集中力が高まったため、彼の次第に強くなる人間の墮落への批判、弾劾がこの作品のバランスを越えている、とも言っている。

小説再開後ジムと離ればなれになっているハックは、グレンジャーフォード家とシェパードソン家の三十年にもわたる怨恨の壮絶な幕切れからのがれ再び筏でジムと再会する。そして「筏ほどいい所はない。ほかのところは窮屈で息がつまりそうだけど、筏の上にいるとすごく自由に気楽でんびりする」と言って、さきにノーマン・メイラーも引用した第十九章の冒頭で味わったようなこの世の good place(ミス・ワトソンの言う意味ではない)をふたたび味わう。

その直後、二人組、自称王様と公爵が筏に乗りこんできてハックとジ

ムをおびやかす。この二人の悪事のかずかずが、カウニーも言うこの小説のバランスをくずしかねないほどの乱暴狼狽ぶりである。ハックとジムを従者にしたがえ、行くさきざきで詐欺を働き、ウィルクス家の遺産を横領し、ついにはジムを勝手に売る手続きまでとる。

第三十一章で、一人になったハックはこの先どうするか後の小屋の中で考えこむ。第三章で森の中で一人で考え、忘れることにきめたこと、つまり祈ることを思い出し、神様のことを思い出し、ジムとの筏のくらしをながいこと回想したあと、ジムを守って地獄に落ちる決意をする。自分は悪ものになってジムを奴隷の身分から救い出す仕事にとりかかろうと決心し、よそゆきを着てジムをさがしにフェルプス農場へとむかう。ここでハックがよそゆきを着る行為はコムニタスの終焉を意味すると考えてよいのではないだろうか。ターナーは「コムニタスの自然発生性と無媒介性が長期にわたって維持されることはほとんど不可能である。」

(p.182)と指摘している。そして実存的あるいは自然発生的コムニタスは、今日のヒッピーたちなら“ハプニング (a happening)”とよぶようなもの、またウィリアム・ブレイクなら“翼にて飛びゆく瞬間 (the winged moments at it flies)”とか“悪徳を相互に許す心 (mutual forgiveness of each vice)”とよぶであろうものにほほ近いと言って (p.182)、さらにブレイクが、『予言の書』(Prophetic Books)で「他者に善をおこなわんとする者は、微に入り細にわたっておこなわねばならない。一般的な善などは偽善者や悪党の弁解である。」⁽²¹⁾とやっているのを紹介している。(p.197)

(4) 翼にて飛びゆく自由

ハックがフェルプス農場につくと、トム・ソーヤーと間違われる。この偽名は、ハックの意図ではなく、すでにハックとジムが生きのびるための逃走を終えており、トム・ソーヤーの枠組に入っているため、ハックにとっては何の意味ももたないものである。終章でミス・ワトソンの遺言ですでに自由の身になっていたジムから、以前流れてきた家の中で、それと知らずに見ていたPapの死についておしえられる。何も知らないハックは、死者としてのPapと生きてきたわけである。しかしジムは責任を持ってハックのPapの代理の役割をひきうけていたのである。

ジムがくさりをはずされ自由になったまさにそのとき、ハックも根源的な自由を、“翼にて飛びゆく”自由を得たと言えるだろう。

赤視父哲二が『いかに読むのか』で、「ハックの決断を要する精神の冒険も、いたずらの才能によってこそ乗り切っていることを見落とすと、通過儀礼の教訓面のみを強調しすぎることになる」と警告しているが、いくぶんの反省をこめて、いつかこの作品の笑いや遊びを取り上げたいと思っている。

〔注〕

- (1) もともとは1985年12月に立教大学で行った講演。文献初出は「へるめす」第6号、1986年3月、岩波書店、その後『知の即興空間——パフォーマンスとしての文化——』（1989、岩波書店）所収
- (2) ヴィクター・W・ターナー著、富倉光雄訳、『儀礼の過程』（思索社、1976）p.150
- (3) E. Miller Hemingway, *Green Hills of Africa*, (1935) エッセイ集
- (4) James Jones の小説, (1951)
- (5) William Styron の小説, (1951)
- (6) Joseph Heller の小説, (1961)
- (7) John Winslow Irving の小説, (1978) 『ガーブの世界』
- (8) Samuel Langhorne Clemens, *Adventures of Huckleberry Finn* (A Norton Critical Edition, Second Edition, 1977) p.96
西田 実訳 『ハックルベリー・フィンの冒険』（岩波文庫, 1977）上, p.213
作品引用は、これらのテキストを用いている。
- (9) Lionel Trilling, 'The Greatness of *Huckleberry Finn*', 1948, Norton 版 *Adventures of Huckleberry Finn*, pp. 318-328所収
- (10) T. S. Eliot, 'An Introduction to *Huckleberry Finn*, 1950, Norton 版 pp.328-335所収
- (11) Norton 版 Text p.233
- (12) マーク・トウェイン, 上野直藏訳 『ミシシッピ河上の生活』（百花文庫38, 創元社, 1948）pp.22-24
- (13) 尾形敏彦編 『アメリカ文学の自己発見』（山口書店, 1981）より岡本紀元, 「楽園の夢」p.410から引用。
- (14) Walt Whitman: *Poetry and Prose*, (The Library of

- America, 1982), pp. 371~375
- (15) ホイットマン詩集; 鍋島, 酒本訳『草の葉』(中), (岩波文庫, 1975) pp. 132-140
- (16) ターナー, 『儀礼の過程』, pp. 171-172
- (17) ヴァン・ジュネップは, 『通過儀礼』のなかで, 通過儀礼の移行は分離, 周辺(あるいはリーメン, ラテン語の敷居を意味する), 再統合の三段階によって特徴づけられると指摘している。
- (18) Victor Turner, *The Ritual Process*, 1969, Cornell University Press, pp. 106-107
- (19) ターナー, 『儀礼の過程』, pp. 143-144
- (20) ダニエル・ホフマン, 根本浩訳『アメリカ文学の形式とロマンス』(研究社, 1983) p. 334
- (21) William Blake, a great literary exponent of *communitas* in his *Prophetic Books*, wrote that “he would do good to others must do it in Minute Particulars; General Good is the plea of the Hypocrite and Scoundrel.” (*The Ritual Process*, pp. 141-142)
- (22) 赤祖父哲二, 『いかに読むか』 — 記号としての文学 — (中教出版, 1981) p. 155.

北星学園大学文学部 北星論集第28号 正誤表

頁・行		誤	正
111頁	6行目	<u>統計</u>	<u>総計</u>
157頁	6行目	<u>本末</u>	<u>本来</u>